慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『学問ノスヽメ』としての威さん
Sub Title	
Author	小室, 正紀(Komuro, Masamichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 No.36 (2003. 3) ,p.116(9)- 113(12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20030331-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『学問ノスヽメ』としての威さん

小室正紀

自由研究とドイツ語講義を履修し、威さんのことを初めて知ったのは、昭和四十五年の四月であり、それは、私に転機をもたらす出会いであった。

その前年、大学紛争が吹き荒れるなか義塾の経済学部に入った私は、真面目そうな外貌を装いながらも、なにかも真剣になれず、すさんだ内面を抱えていた。入学後まもなく、日吉キャンパスは学生自治会による全学バリケードストに突入し、一年の半ばは講義も無かったが、バリケードの内側に立つ気にはなれなかった。自治会にも全共闘にもセクトにも、若衆宿的集団主義に対するような違和感を感じていたし、「破壊をしてみなければ新たに生まれるべきものはわからない」といった主張にもついていけなかった。かと言って、当時、彼等に反論する論理も勇気もなかった。マスコミや言論界は、彼等の「造反有理」に同情的であり、教員の多くも彼等に理解を示すか沈黙している状況で、未熟な一介のノンポリ学生もまた沈黙せざるを得ず、自然、大学から足は遠のいていた。

講義が再開されたのは秋も深まる頃だったと思うが、その講義も空しく思え、身を入れることができなかった。家は出るものの、講義には出ず、喫茶店で無頼派の小説などを読み、場末の名画座の暗い座席で時を過ごした。昼頃に名画座に入り、三本立ての映画を見て館を出ると、日は既に暮れており、名作の感動以上に寂寥感にとらえられることがしばしばであった。そんな状態であったから、大学一年の成績はひどいもので、必修科目をいくつか落とし、スレスレの進級であった。高校時代に、生意気にもドイツ語を多少かじり、“Tonio Kröger„などを原

文で読むまねをしていただけに、ドイツ語はなめてかかり、これも見事に一科目を落としていた。

そんな一年が過ぎてみて、無頼派にもなれない小心さからか、大学で何かをつかむ努力をしてみようという気になったのだろう。敢えて落としたドイツ語にこだわり、威さんの自由研究を履修したのである。また、その履修を内心で決めてから気づいてみると、必修ドイツ語クラスの担任も威さんであった。

セミナーの最初の日、教室に入ってきた威さんを見た我々は、一様に、それが教師だとは気が付かなかった。その頃、威さんは三十一、二才であったと思うが、まるで学生のように若々しく、我々六、七名の履修生に、兄貴のような親しみを感じさせたのである。「鈴木先生」ではなく、じきに我々の間では「威さん」と呼ぶようになったのも、そんな親しみのなせるわざであった。ちなみに、この小文で、失礼を顧みず、最初から「威さん」と書いているのも、いまだに、そうつぶやいた時に当時の感覚が蘇ってくるからである。

セミナーでは、Fridrich Engels, "Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenshaft,（『空想から科学へ』）を読み、ドイツ語講義の方は、Karl Marx, "Lohnarbeit und Kapital,（『賃労働と資本』）がテキストであった。といっても、先を急いで全巻を読了するような授業の進め方ではなっかった。講義の場合にもその傾向はあったが、セミナーではなおさらで、ドイツ語構文の細部の仕組みやテキストの内奥に我々の注意を引くのが常であった。例えば、'Entwicklung'という名詞を分解し、その各部の語源的な意味を示しつつ、さらにそのような用語が一八八〇年代の西欧で使われる場合の思想史的な背景にまで話は及んでいった。そのため、『空想から科学へ』は結局、一年で二十頁程しか進まなかったと記憶している。しかし、それでも威さんの説明によりドイツ語に対する興味はいやが上にも高まり、また、西欧思想を歴史的に考える高揚感に、いつしか浸るようになっていた。それは、未熟な若者でも、背伸びをしながら垣間見ることのできる「近代」知性の一端であったのだろう。

そのような「背伸び」の典型は、Hegelの"Phänomenologie des Geist,（『精神現象学』）緒論を読んだことであった。セミナーでは、この夏、一年前の履修者も共に、

信州戸隠の民宿で三泊の合宿をし、テキストに同書を選んだのである。合宿にはヒロ子夫人も加わり、戸隠の夏を楽しむ余暇もあったが、本来の目的にも充実感があった。威さんに刺激されて夜まで同書の細かな部分の解釈に熱く勝手な議論を続けたことが思い出されるのである。

ただし、我々が、威さんに惹き込まれていったのは、このようなテキストの扱い方のみではなかった。否、むしろ、その背後にある威さんの旺盛な知的関心の故であり、それを友人のように分かりやすい言葉で投げかけ、学生と共有しようとする気さくな性格のためであったように思える。セミナーでも、合宿でも、威さんの話は多岐に及んだ。ゲーテ、ヘーゲル、ニーチェ、リルケのような御専門にかかわる対象は勿論、ハイデッカーを引くかと思えばアインシュタインを語り、その一方で、バッハ、モーツアルト、ベートーベンからフルトヴェングラー、カラヤン、バックハウスまで、音楽の世界に触れる。夏目漱石から太宰治まで、日本近代文学へ想いを馳せるかと思えば、「ゲルニカ」におけるピカソの天才に感動し、またある時は日本の書道の心を読み解く。「高尚」な話ばかりではなかった。『愛と誠』（当時人気の連載劇画）の愛読者ぶりには常に接することができたし、「西城」（彗星のようにチャンピョンになったボクサー）のカッコ良さを少年のように語った。

話は、教室の中のみに止まらなかった。まだ大学紛争は解決せず、教室で講義ができない時には、日吉のグラウンドの芝生に座り、威さんの話を聞いた。何人かで杉田のお宅へ何度も押し掛け、ヒロ子夫人の手料理を御馳走になり、それこそ夜中までお邪魔をした。そのような場での威さんの話は親しみやすくも眩い教養に思え、次第次第にその世界に惹きつけられていったのである。

しかし、今、考えてみると、我々を惹きつけたものは単なる教養ではなかったような気もする。どんなに優れた人であったとしても、三十歳を越えたばかりの若者の教養には、限界がある。また、義塾の教師達の中にも、私個人の周囲にも「教養人」は沢山いた。しかし私は、そうした「教養人」に、それ程には惹かれなかった。彼らに対しては旧制高校・帝国大学型の大正教養主義の流れを見るようで、時には反発さえ感じていた。「近代」を後光として背負い、教養の高見から「治安の夢に耽（ふけ）り、たる栄華の巷（ちまた）低く見」るという姿勢への反発であった。

威さんの姿勢は、これとは異なっていた。我々を高見から啓蒙する「教養人」ではなく、我々の前には立っているが、我々と同じ方向を向いている溢れるばかりの知的関心の持ち主であった。

ある時、威さんに、「なぜ、大学院へ進み、勉強を続けたのですか」といった愚かな質問をしたことがあった。それに対する威さんの答は、「面白かったし、自由に生きられる仕事につきたかった」という趣旨であったと記憶している。この威さんの言葉を、その頃は深く気にも留めなかったが、今考えてみると、その言葉の背後にあるものにこそ魅力を感じていたような気がする。それは、こなれの悪い言葉でしか表現できないが、市民個人の「私立」のための知的関心とでも言うべきか。あるいは、アカデミズムと生活の間の市民的バランス感覚と言ってもよいかもしれない。

そんな威さんのセミナーに出ているうちに、次第に心の空洞が埋まってくるのを感じていた。大学二年が終わり日吉を去る頃には、学部卒業後も勉強をつづけたいと漠然と思うようになっていた。それが、なかなか生活基盤を得られない道であることも知ってはいたが、それでも良いと考えていた。また、浪人生活に備え、アルバイトとして翻訳の下訳仕事でもできるようにと、その後、数年間Göte Institutеに通った。若者らしい甘い計画で始めたこのドイツ語は物にはならなかったが、サイドビジネス計画としてドイツ語を選んだのも、その面白さを威さんに教わった故だと思う。

そんな横道もあったが、結局、私は学者への道を進んだ。その道への転機は、日吉で威さんに出会ったことである。威さんの存在とセミナーは、私にとって『学問ノスヽメ』であったのであり、それを抜きにして、多分、今の自分は無いと考えている。